

「周りは変わってしまった」 ～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

7月号

緊急事態宣言により、新型コロナウイルスの感染者は減少したとはいえ、未だ出口の見えない状況が続いています。そんな中、感染者だけでなく、検査で陰性だった人や、周りの人まで差別的言動を受けるケースが相次いでいます。新聞によると、ある大学で教員の感染が判明した後、付属高校の制服を着た生徒が「コロナ、コロナ」と中傷されたり、東京や大阪など感染拡大地域を行き来する長距離トラックの運転手の子どもが、学校から自宅待機を求められたりしたといます。集団感染が起きたクルーズ船に乗っていた男性は下船後「近所を歩いてウイルスをまきちらしている」という噂を流され「自分は乗船前と変わっていないのに、周りは変わってしまった」と語っていました。

これらの記事を読んで「本当に怖いのは、らい菌なんかじゃない。怖いのは、ハンセン病患者の苦悩を見てくれない壮健さんたち（健常者）の目です」というハンセン病元患者の言葉を思い出しました。エイズウイルスなどの感染症でも、ウイルスを避けたいという意識から差別は起きてきました。

私たちは答えのない問題や見通しのつかない状態は不安で避けたがります。不安を解消しようと相手を攻撃したり、のけ者扱いにしたり、その矛先は弱い立場にある人達に向けられます。しかし自分中心で相手を顧みないようでは、人権が尊重される社会をつくることはできません。私たちは自分の経験する辛さや痛みを通して、他の差別の痛みを共感することができます。そのための第一歩が「自分がされたらどう感じるか想

像してみることに」です。想像力を働かせることで相手の立場に気付き、相手への心遣いが生まれるのではないのでしょうか。共に生きる社会はそんなことからつくられていくのではないかと思います。

